

ワンダフル空手第30話

春は空の青さがおぼろげに見える。浮かんでる白い雲も心なしか緩やかに流れている。
雑木林の中を蛇行してる小径、枯葉で覆い尽くされていたのだが、日一日と新鮮な緑色に変わっていく。あつという間に新鮮な緑の色がおおってしまった。どこを向いても緑、緑である。乱立する木々の枝にも芽吹いてきた。
ぼやけたような青空だが、大地は生命の息吹で気合いが感じられる。
そこでワンダフル空手第30話である。

アラバマに就任して最初の数カ月は夢中で過ごした。
正直に言って NY で茂兄の道場を最初に見た時、生徒の基本の技、立ち方や一つ一つの技の決めが正確で鋭かった。それに型や組手の質の高さに驚かされた。
茂兄の指導する稽古を見た後、不安は一気に膨れ上がった。
アラバマに着いて最初の稽古指導をしたとき生徒の基本技、型を見て、茂兄の道場生と比べてレベルがまったく違っていた。
基本も組手も荒削りで、型はメチャクチャで見られたものではなかった。
ただ同時にこれからの指導に NY の茂兄の道場生に負けない様な生徒をそだてなくては行けないと闘志のような気持ちも湧いてきた。
闘志はあったが正直に言って少しの不安は心の中にくすぶっていた。
不安や身体を縛るような緊張感も極真カラテ発展のため、前に前に出なければいけなと言う使命感が気合を引き出してくれた。
最初の黒帯、茶帯との組手、他流派への挑戦 {道場破り} とにかく眼を三角四角にしながら、肩張ってがむしゃらに出た。
「結果よければ全てよし」と人は言うが、私は極真の看板を背負っていると言う、気負い、気合だけで何とか無事に走り抜けたと思っている。

嵐が去った様に静かな毎日が来た。
ようやく落ち着いて指導に専念する生活に入った。
平穏な生活の中で周りの世界をよく見ると、今まで気が付かなかった、アメリカ人の身体の大きさがチョット気になりだした。
半面自分の身体の細さ、ウエイト {60キロ} が軽すぎることに不安が新たに生まれた。
もう一度カラテの稽古を真剣にやり直さなくては行けないと心底思った。
よく考えてみると、今まででなんとか怪我も倒されもなく、こなしてきたのは、むかし春山と茂兄を追い駆けたときの稽古の貯金があったからだと思った。
あの時の毎日は、ただ空手の稽古だけであった。
朝起きてカラテ、学校に顔出してもカラテ、夜は震えながら稽古、マイリマシタ、いつか必ず復讐をするぞ！そのまま寝る時もカラテ、夢の中までカラテが入って来た。
その一つ一つの経験と汗が身体の隅々まで染み込んでいた。
だからなんとか、ここまで歩いてこられたと、ホント思った。
ただ稽古の貯金はもう使い果たしたか、あと僅かしかないように感じた。
心新たに稽古をしなくては行けないと気合が胸の底から湧いてきた。
同時にカラテの対する考えも、もっと深く、真剣に洞察しなくては行けないと自覚した。まさに新たな

な再出発である。

あの頃、稽古の途中である黒帯が「極真カラテとはなんだ？」と質問してきた。

牛殺しの「グランドマスター、マス・大山」は知っているがその流派が極真カラテということは知らなかったようである。啞然とした。

それと「キョクシン」と発音できず「コクシン」となってしまった。

お先、真っ暗な気持ちになった。

はっきり言ってアラバマの連中は流派は関係ないように感じた。

YMCAに来る人は、それなりに自分の身体を練っている。

組手だけでなく基本の技や、動きを説明する時に生徒に試させ、受けるのだが自分の構えを確りしていないと弾き飛ばされそうになる。

生徒が基本の技や動きが良くなってくるとよけいに考えさせられた。

ときには女性も半端じゃない力を出してきた。

身体を鍛え直さなければいけないと思った。時間は充分ある。後は自分次第である。

真剣に稽古を始めた。池袋の本部では自分の稽古は殆ど出来なかった。

極真会館のマネージャーみたいになっていたからである。

32歳を超えていたが、気持ちはまだまだ若い。

今からでも遅くはない、そう自分に言い聞かした。

まず毎朝どんなことがあってもランニングを始めた。

ランニングの後は柔軟、庭の隅にある大きな松の木にブランケットを巻いた手製のサンドバッグに突きと蹴りを入れる。最初は動きを入れず突きや蹴りだけに絞ってこなし、次に動きを入れて、一人一人の生徒の技や癖をイメージして稽古をする。

腕たせ {拳立} 腹筋、四股を踏み、最後は松の木に向かって押し込む。



ロン支部長の正拳を受ける。“パワー”と気合を入れる。

支部長のロンは私を家族の様に思って面倒をみてくれた。
稽古のない日もある日も関係なく毎日のように彼はいろいろと世話をしてくれた。
後で話す私がアラバマに46年いる大きな理由はロンとの友情が深いからである。
ロンと出会っていなかったら、とくに他の大きな州に移っていたかもしれない。
そのロンであるが、当初カラテそのものの考え方が私とまったく違っていた。
アラバマに来て直ぐある晩食事の後、ロンが「カラテ家は先ず自分の家を持ってないだろう」と言い出した。なにを言っているのか分からなかったが、よく聞いているうちに話の内容が、カラテ道はビジネスとしては考えられない、そんな風に聞こえた。
だからカラテ家がカラテだけを指導して自分の家を購入する事はできない。
この時のロンの話ははっきりと覚えている。驚きと同時に深く胸に刺さってきた。

カラテは相手を倒す、そのことに大きな意味がある。そんな感じである。
ロンの話を聞きながら道理で組手が荒い、一言で言えば激しすぎる組手であった。
カラテとは稽古で練った技で相手をノバス、倒す。それがカラテである。
ロンだけでなく他の黒帯も茶帯も、単純にそう考えていたように見えた。
だから稽古の最後は組手で、初心者も関係なくガンガン突いて蹴っていた。
まるで自分の技の為に、ビキナーを実験台にしているように感じた。
頭がホント痛くなった。時間をかけて少しずつ説得し始めた。
稽古の後「オイ、ちょっと待てよ。相手は何も分かっていないんだヨ、それを君たちが殴る、蹴るでは道場の発展はないですよ！それに小学生相手に、大学生が喧嘩しているような感じを受けますよ！不公平じゃないですか！」と話す。
ロンが「・・・でもカラテは相手を倒す武道でしょう、厳しく稽古をする必要があるではないか、残った人だけ本当のカラテを指導すればいいのでは」頭にガーンときた。
頭痛なんてものじゃない、お先真っ暗になった。
そこで、サムライの時代でも君達みたいな組手はしなかったよ・・・などと、いろいろと例を挙げて話始めたが、説得には時間がかかると思った。
私の話を聞いてくれたが、長年そう信じてきた気持ちは簡単には変わらなかった。
まったくすごい所に来てしまったと思った。

とにかく自分の手で育てた黒帯をつくらねばいけないと思った。
身体で仕込むためにはやはり組手をやらなくてはいけない。
毎日出席しただけの生徒全員と組手をやることにする。
道場が狭かったが、毎日30人以上は来ていた。
組手を始めたが正直に言ってきつかった。身体中、青タン、赤タンだらけになった。
出席した生徒全員と組手をすることに決めたが、どこかで身体を休める様にするため、最初に手強い相手を指名して、その後に軽く流せる生徒を呼んだ。
組手の時間も相手によって1分になったり2分になったり変えて仕舞った。
それでも生徒の癖も分かっていたので、なんとか毎日こなせた。

私が指導ははじめて入門した生徒と、来る前に色帯を取った生徒の差が徐々に出てきた。私が来る前の生徒はやはり悪い癖があり、その癖がなかなか取れないで苦勞していたが、新しい生徒は正確に基

本技を身に付けていった。

4～5カ月過ぎるころには古い生徒と比べても遜色なく組手をこなし始めた。

指導の手応えが感じられた。指導しながら時々私が長年苦勞してやっと掴んだ組手のポイント、拍子などを全部教えるのは考えさせられた。

この生徒に此処まで指導して良いのか、それともある程度の線を引いておかないといけないと思うようになった。

例えば回し蹴りの変化技を指導する。勘の良い生徒はすぐ身に付ける。

そして他の生徒に試す。簡単にその変化技が決まる。

別に出し惜しみする訳ではないが、よく生徒の人間性と言うか性格を見極めてから指導をしなくてはいけないと思うようになった。

出席した生徒の顔ぶれを見て、その日の指導内容やテーマを考えた。

昔から自分の弟子を取るときに技や動きを指導する前に、時間をかけてその人間を見ると言われてきた。まったくそうだと思った。



46年前白いシャツを着て東谷が中央に立っている。左隣は三浦、渋い俳優高倉健に似ている。

・・・チョット話が外れるが、ここまで書いてきて昔極真総本部の内弟子になった東谷巧の事を思い出した。後に東谷は極真カラテ全盛期時代に名を残したカラテ家である。

第1回世界大会でも活躍し、同時に地上最強のカラテの映画にも登場している。

その彼が内弟子になって最初の1～2カ月は道場の掃除、と後は雑用だけだった。

いつも私が2階の本部道場で指導している時、階段の端から熱い視線を投げていた。



左から周司、私の隣が佐竹、茂総主、角田、三浦師範、石井館長みんな若かった。

もう一人、むかしの内弟子を思いだした。

名前を山内周司と言ひ、彼は正道会館の黒帯だった。

身長は私よりいくらか低かったが、胸の厚さは私の二倍はあった。

内弟子はその頃既に東海林やアトランタのツトム君などが卒了して、後にその頃極真会愛媛県の高見支部長の息子、高見彰が来ていた。

後から来た周司は何をやらしても呑み込みが早く、すでに黒帯を取っていた彰が後手に回っていた。

日常の掃除や料理すべてである。

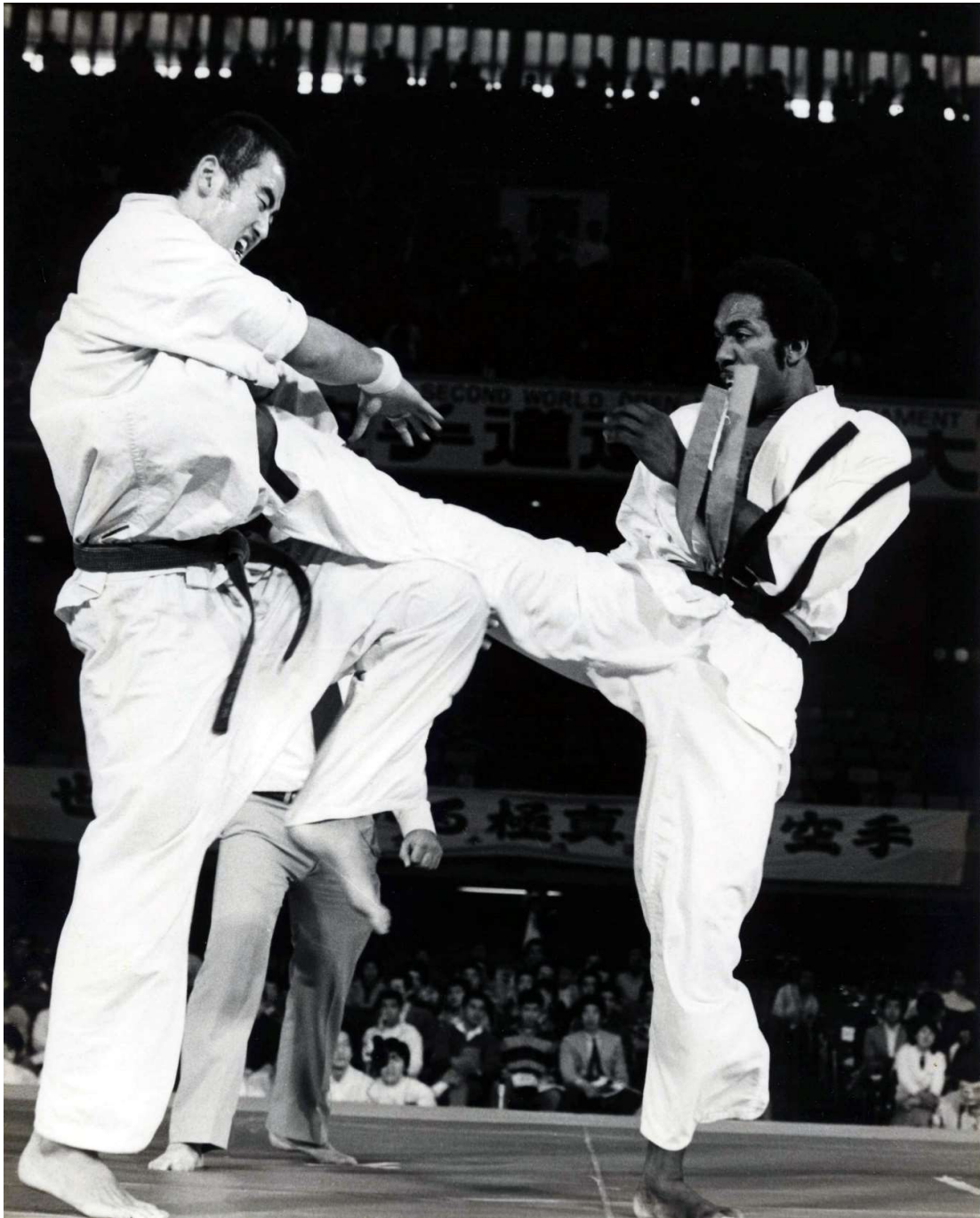
稽古も私が一言、技や動きのヒントを与えると誰よりも早くそのポイントをものにした。

稽古も白帯を締めて他の黒帯に負けない気合を出していた。

組手になっても、気合負けしないでガンガン前に出て技を出していた。

内弟子の彰を相手にしても周司の方が押していた。彰が気合負けしている様に見えた。

面白かったのは稽古が終わった後は、周司は彰を立てて言うことを聞いてた。



世界大会、チャックがどんどん攻める。

ある晩、世界選手権で活躍した私の弟子チャックを相手につけた。
チャックは周司より身長が頭二つぐらい高く、蹴りも突きも抜群の力を持っていた。
構え合ったときチャックが周司を見下ろすような格好になった。
回し蹴りをミットで受けるのだが、周司は気丈にもチャックのパワフルな回し蹴りを片手で受けていた。私は何も言わずに見ていたが、周司の根性にあきれた。
周司が受け終わった後、腕と肩をほぐしていたのを見ていて自然に笑いがもれた。
周司は毎日なにかにチャレンジしているような、気合を感じた。
自分が何をすべきか周りの世界に常に気を配っているように見えた。
朝から晩まで稽古、稽古の毎日の繰り返しの生活の中に鋭い気迫を持っていた。

周司が内弟子の生活を終了し明日の朝、日本に帰るその晩、稽古のあと道場で私が「よく頑張ったな・・・、なにか出来ることがあったら聞いてあげるよ」と言った。

周司が正道会館の先輩である佐竹との組手の話を始めた。

佐竹もチャックと同じように周司より背が高く「・・・いつも組手になると何もできずに押されてしまうんです」確かではないが、苦手なんですと言っていたように思った。

そこで前から周司に教えたかった下段後ろ蹴りを教えた。

私は最後の日までその技を教えなかった。

技や動きがその人の中に溶け込むのは、その人がどれだけカラテに対する情熱、気合いをもっているかと言うことがまず第一である。

周司の毎日を見ていて彼がいつもカラテの技や動きを追い駆けているのを感じた。

だから教えれば素早く自分のものにできる、と思っていた。

“周司に佐竹とは身長さ、身体が違い過ぎる。

正面から突き合い蹴り合えば、どうしても身体のハンデが出てしまう。

一発で倒せる上段の蹴りはお前が身長がない、出せば簡単に受けられてしまう。

チャンスがあるとすれば構えたときの前足、膝の上を如何に攻めるかと言うことだ。

周司は動きに鋭さ速さをもっていた。カラテの技の中でも踵を使う技は必殺と言える。

決まれば一発で、身長さ、体重さに関係なく倒せる。

そんなことを説明しながら、周司に下段後ろ蹴り {後ろ回し蹴りではない} を見せた。

サンドバック用に作ってある柱に蹴りを出して見る。

周司に同じ動きをやらせると、2～3回でそのポイントを飲み込んだ。

周司の眼が輝いたのをまだ覚えている。

日本に帰った周司から「師範、あの後ろ蹴り一発で決まりました。相手は動けませんでした。佐竹先輩では有りませんが金ちゃんに決まりました」と嬉しそうな電話が入った。

・・・いずれは山内周司のことも書きたかったので丁度良かった。



SFのファイターズ・カップ、私より小さいトロフィーを持つ周司、当然である。

周司は、だいぶ時間がかかったが、2015年ワールド大山空手の黒帯に昇段した。
現在はカルフォルニアのサンディエゴに事務所を構え日本やヨーロッパ、アメリカを飛び回って活躍している実業家である。

忙しいなか時間を見つけ、稽古もしてると時々私に連絡をよこす。
自分の稽古と厳しい経験で得た空手道の奥の道を、何処まで指導していいかやはりその人のカラテにお対する姿勢、熱意、などをよく考えなくてはいけないと思った。

チョット話がそれすぎたようだ、話を戻す。・・・殴られ、蹴られ、痛く、つらい、悔しい思いを何度も経験してやっと身に付けた自分の組手の技や動きを簡単に教えてしまうことを止めた。
生徒の人間性を見ないで技や動きのすべてを指導してしまう事は考えなくてはいけないと真摯に思うようになった。
アラバマにきて指導しながら、昔の武道家の気持ちが幾らかわかり始めた。

私の指導も軌道に乗った。他の黒帯や茶帯の組手も厳しく見守るようにした。
毎日の稽古指導が待てないような気持ちになっていた。
そこで一度生徒全員を使って演武会を開こうとなった。
MR ガーウック氏もよろこんで賛成した。ある日の夜デモをすることになった。
会場はYMCAで一番大きなジムに決まった。ロンの両親も来てくれた。
会場は満員である。生徒もエキサイトしていた。
簡単な基本技から約束組手、型、組手などを披露して最後に試割をすることにした。
自然石を生徒が拾ってきてくれた。
最初に見た時「チョット君～」となったが、もう遅かった。
試割の最初は飛び蹴りであった。板三枚をロンが持ち、その前に二人の生徒が片手をのぼし肩を組みようにして立つ。
その二人の腕を飛び越えて、ロンの持つ板を足刀で割る訳である。
石も飛び蹴りも3日前の晩に予行練習した。ただその晩は石を自分で見つけた。
デモの晩は石を生徒が見つけてくれたのである。
いよいよ試割、会場が静かになる。気合いとともに私は飛んだ。
みごとに足刀が決まり、バシ！と渋い音をたてて3枚の板が割れた。
ところが割れた板がロンの高い鼻にまともにヒットしてしまった。
鼻が折れて仕舞ったのである、血が飛び散る。急いで手当をする。
それでもデモは続行である。なぜか忘れたが板2枚を貫手で割ることにした。
気合いを入れて正直に貫手を出す。ところが板が動いた。
持っている連中が分かっていないのである。右手の薬指に、焼ける様な感覚が走る。
見ると第一関節の白い骨が見えた。エッ！急いで、貫手の動きから指の関節を曲げ、そのまま板を割る、割ったところで貫手を見せる。観衆は誰も分からなかった。
板を持っている連中も気が付かなかった。急いでテープで縛る。
最後は石割である。3つのコンクリートを重ねて台を作り。
その上に50パンドのウエイトのプレートを乗せる。気を静めて、構える。
簡単に割ってしまっただけはドラマがなくなる。もったいぶらないといけない。
気合いもろとも右の手刀で叩く。ガンとジムが揺れ動くような響きが出る。

一発、2発、～5発叩いたとき、石はなんの反応も見せなかった。
ただテープで縛った薬指から7発目ぐらいから、血がピーッと正面に飛んだ。
それから、手刀で叩くたびに正面に私の指から血が飛び出す。
正面で椅子に座って見ていた、女性が貧血を起こし、椅子から崩れ落ちた。
ロンの鼻が折れ、血が飛び出した後、次は、私が手刀を振るたびに、その女性の目の前に血が飛ぶ。
彼女の目の前に飛んでくる血を見ながら、顔色が見る見るうちに真っ青になり、そのまま倒れて仕舞ったのである。会場は騒然となる。
急いで女性を医務室に連れて行く。デモもしばらく中断した。

しかし私の気持ちはおさまらない。デモを続行する。
私はまた丸い大きな石に向かって構えて手刀を気合を入れて打ち始めた。
10発目さらに20発目が過ぎた時、土台に積んだコンクリートが崩れて割れた。
ロンが傍に来て師範止めた方が良いと囁く。
私は汗まみれで、きっと夜叉のような顔になっていたようである。
新しいコンクリートをもってこさせて台を作り直す。また気合を入れて叩き始める。
叫ぶような気合36回目、やっと石が割れた。
観衆が総立ちになってわれる様な拍手をしてくれた。
忘れられない演武になった。しばらく右手が握れなくなった。

続く